「とんぼのめがね」作曲者の孫

世界を癒やす調べ

平井秀明さん、元喜さん兄弟

ニューヨーク祝祭管弦楽団音楽監督・指揮者の平井秀明さん(四七)と、英国在住のピアニスト・作曲家の平井元喜さん(四四)の兄弟は、それぞれバチカン市国と駐日デンマーク王国大使公邸で演奏を披露した。二人は広野町ゆかりの童謡「とんぼのめがね」を作曲した平井康三郎さんの孫で、世界を舞台に多彩な活動を展開している。

サン・ピエトロ大聖堂での演奏に臨んだ秀明さん

平和願う音楽献呈 バチカン ローマ

秀明さんは十月、日本、米国、イタリアの有志による合同合唱団とともにバチカン、ローマの演奏ツアーを行った。

二十八日にバチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂で世界各地の紛争やテロ、貧困、差別などの問題に対し人種や宗教の枠を超えた平和を願うミサが行われた。秀明さんは自ら作った「Ａｖｅ Ｍａｒｉａ」をはじめ、バッハ、モーツァルトの曲など四曲を指揮した。

秀明さんの指揮で歌声を響かせたミサ

ローマ法王とバチカン市国への献呈文を「Ａｖｅ Ｍａｒｉａ」の自筆譜に添えて奉納した。

二十七日にはローマのサン・ジョバンニ・フィオレンティーニ教会で「Ａｖｅ Ｍａｒｉａ」とベートーベンの交響曲第九番を演奏。三十日にはパラディウム劇場でローマ・トレ管弦楽団の二〇一七～一八シーズン開幕定期演奏会にデビュー。メンデルスゾーンのピアノ協奏曲と、ベートーベンの「第九」を指揮し、七分間もの熱狂的なスタンディング・オベーションを受けた。

秀明さんは「世界一の教会のスケールや荘厳な雰囲気に圧倒された。大変光栄なことと感謝している」と感想を述べた。

デンマーク王国大使公邸でピアノ演奏を披露した元喜さん（左）とスヴェイネ大使夫妻

民話と音楽融合 デンマーク王国大使公邸

元喜さんは十一月九日、東京都渋谷区の駐日デンマーク王国大使公邸で開かれた日本・デンマーク外交関係樹立百五十周年記念「音楽と朗読の夕べ」に出演し、世界の民話と音楽が融合した美の空間を描きだした。

元喜さんは二〇〇七年から国際文化交流・教育プロジェクト「世界を結ぶ民話と音楽」として音楽と民話の朗読、映像のコラボレーションに取り組んでいる。

デンマーク民謡に乗って踊りの輪を広げた出席者

デンマークでの初演からこれまでに約二十カ国で開催し、十周年を迎えた。今回はその一環で、２０２０東京五輪・パラリンピック文化プロジェクトとしての第一弾。

主催者のフレディ・スヴェイネ駐日デンマーク王国大使とリセ夫人が約五十人の出席者を歓迎。第一部は「デンマークと日本の文学と絵本」と題し、「『小倉百人一首』による音詩」を元喜さんのピアノ、石山智恵さんの朗読、久保修さんの切り絵で魅了した。情感豊かな和歌の世界を柔らかな旋律が彩り、訪れた人を楽しませた。続いてスヴェイネ大使がデンマークの小説「スミラの雪の感覚」を朗読し、平井さんが伴奏。絵本「１００万回生きたねこ」も披露された。

第二部は「デンマークと日本の音楽」として、元喜さんが自らの組曲「日本の情景」や東日本大震災後につくった「Ｇｒａｃｅ ａｎｄ Ｈｏｐｅ～祈り、そして希望～」、ニールセンの「六つのユーモレスク・バガテル 作品11」などを熱演した。最後にスヴェイネ大使夫妻が「糸まきまき」で知られるデンマーク民謡「靴屋のポルカ」を歌いながら踊り、出席者全員で一緒に踊りの輪を広げた。

デンマーク料理を味わいながらの交流会もあり、和やかに懇談した。元喜さんは「音楽は国境を超える。日本とデンマーク、世界の友好が深められるよう努めたい」と話していた。

福島民報社の佐藤克也文化部長が出席した。